

谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」を読む
―耽美の花を咲かせて―

岩見沢校4年 磯尾隼人

縁側にひとりさびしくうづくまるねこの背中に秋のかぜ吹く
（「春、夏、秋」『相聞』昭和四年）

まことに喜ばしき出会いではないか。初めて谷崎潤一郎の小説を読んだのは、高校二年の秋であつた。タイトルは「痴人の愛」。比較的長い小説であつたが、あまりの面白さのために一気に読んでしまった。それ以来私は、この作家の書いたものを手当たり次第に、貪るように読んでゐる。ナオミに魅せられた「痴人の愛」の主人公・河合譲治しながら、谷崎潤一郎の織り成す、はなはだ驚嘆すべき文字による魔術に、うっとりとし心を奪われてしまったのである。河合譲治にも劣らぬ、まさに「痴人」。ナオミの勝ち誇った笑い声がどこからか聞こえてくる……。

谷崎潤一郎は明治・大正・昭和の三代にわたり、五十年以上にもなる長い作家活動の中で数多くの優れた作品を生み出してきた。日本の文学史上における谷崎潤一郎という作家の存在、そして彼の作品は、たとえるならばなまめかしく咲き匂う耽美の花、とても言おうか。その花の薫りは、万人を妖しく魅了する。今回読んだ「猫と庄造と二人のをんな」『改造』昭和十一年）もまさしく一輪の耽美の花であり、まぎれもない傑作である。

「猫と庄造と二人のをんな」は関西における庶民の生活を描いた一種の記録であり、庄造という名の男と、彼を奪いあう二人の女性との三角関係を中心に話が展開していく。それに庄造の母であるおりんの思惑が乗っかり、非常に複雑で緊張感のみなざる人間模様。そして、庄造と二人の女から成る三角関係の真ん中に、リリーという名前のメス猫が堂々と寝そべっている。ちなみに谷崎の猫好きは相当なもので、随筆には「猫——マイペット」『大阪毎日新聞』昭和五年）など猫に関するものがいくつもあるし、また、千葉俊二の「谷崎文学を貫くもの」（千葉俊二編『谷崎潤一郎必携』學燈社・平成十四年）によると、「猫犬記」という題の、「猫と犬を愛してゐた男がだんく犬を憎しみ猫を愛スルやうになる」「自分が女（男）性の猫と化しA子に愛撫される」（p8）といった小説の構想も練っていたようである。

庄造は「怠け者の、意氣地なしの、働きのない男」であり、「猫を可愛がることゝ、球を撞くことゝ、盆栽をいぢくることゝ、安カフェエの女をからかひに行くこと」より他に、何の取り柄も楽しみも持たない。作中の会話文に表出する、うねりうねりとした上方方言を體現したような、まさに「瓢箪鯨」のような男である。

「頭の單純な」庄造に対し、彼の母を含めた、庄造を取り囲む三人の女たちは皆ずる賢く、陰険であり、おまけに嫉妬深い。特に庄造の元妻の品子は何かにつけて「賢女ぶる」ために、庄造が無能だけにそれが余計に鼻につくのだろう、彼からひどく憎まれてゐる。庄造はこの女たちのことを愛してはいない。庄造の愛情はただ猫のリリーにのみ注がれる。

庄造はよく、リ、ーのことで品子といさかひをした時分に、「僕リ、ーとは屁まで嗅ぎ合うた仲や」などゝ、嫌味めかして云つたものだが、十年の間も一緒に暮らしてゐたとすれば、たとひ一匹の猫であつても、因縁の深いものがあるので、考へやうでは、福子や品子より一層親しいとも云へなくはない。事實品子と連れ添うてゐたのは、足かけ四年と云ふけれ

ども正味は二年半ほどであるし、福子も今のところでは、來てからやつと一と月にしかないのである。さうしてみれば長の年月を共にしてゐたり、ゝの方が、いろんな場合の回想と密接につながつてゐる譯で、つまりリ、ゝと云ふものは、庄造の過去の一部なのである。

人間の女性よりも猫の方が「一層親しい」とは奇妙ではないか。いや、腹の中に「深い企み」を持つ女たちに比べ、リリーは極めて純粹な存在として示される。それゆえ、「猫の美点」が庄造の目には強調されて映ずるのである。愚かな庄造にとつては、人間の女性よりも「ニヤア」としか言わぬ猫の方が親しみやすいに違いない。そのために庄造はリリーを溺愛するのである。リリーに対する強烈な愛情は、むしろフェティシズムに近いものであるように思われる。リリーはもはや彼の「過去の一部」なのであり、リリーへの愛情は、裏を返せば庄造自身へ向けられていることになるだろう。

庄造の妻である福子は、品子を追い出したことによる満足感と彼女に対する優越感に、庄造の妻としての喜びを見出しているように思われる。ゆえに「猫と女房とを天秤にかけると猫の方が重い」という庄造の価値観は、彼女の「己惚れ」を否定するものであり、そのため庄造から激しく愛されるリリーの存在は、福子にとつて不愉快なものである。さらに、リリーに対する嫉妬はこの小説の冒頭に据えられている品子の手紙を読んだことによつてますます燃え上がる。この嫉妬は庄造に対する愛情からくるものであるとは言えないだろうが、庄造の、リリーへの愛情は福子にしてみればかなり深刻な問題なのだろう。しかしながら、「あんた、わてより猫が大事やねんなあ」などといった福子の痛切な訴えは、リリーのことしか頭にない庄造にしてみれば、「阿呆らしなつて來る」ものにすぎないのである。

庄造の思考はまことに底の浅いもので、「底に底がある」女たちの知恵には遠く及ばない。庄造をめぐる三人の女それぞれの策略によつて、庄造はリリーを手放してしまい、リリーは品子に引き取られることとなる。けれども焦がれる心を胸のうちに封じておくことなど、リリーとの「楽しいいちやつき合い」を生きがいとする庄造には到底無理な話である。福子に堅く禁じられていたにも関わらず、結局庄造は品子の家を訪ね、こつそりとリリーに面会する。作者の谷崎潤一郎が意地悪な笑みを浮べ、この面会に超一流のアイロニー溢れる罫を仕掛けたことなど誰が知ろうか。

再会の喜びひとしおと思いきや、あにはからんやリリーは庄造に「ひどく無愛想な一瞥を投げた」だけであつた。猫の方が人間よりもはるかにしたたかではないか。庄造は猫のリリーにあつさりを見捨てられた。品子から愛されるリリーにはもはや庄造の愛など必要ないのである。庄造とリリーとの「いちやつき」ぶりが常軌を逸していただけに、リリーを失った庄造の無念さや失望感はひとときわ大きい。そして、庄造の孤独が浮き彫りになる。この物語は次のようなかたちで幕を閉じる。

と、その時ばかりと足音がして、

「姉さんもうついその角まで來てまつせ。」

と、初子が慌しく襖を開けた。

「えッ、そら大變や！」

「裏から出たらあきまへん！……表へ、……表へ廻んなはれ！……穿き物わてが持つて行たげる！ 早よ、早よ！」

彼は轉げるやうに段梯子を駆け下りて、表玄關へ飛んで行つて、初子が土間へ投げてくれ

た板草履を突つつけた。そして往來へ忍び出た途端に、チラと品子の後影が、一と足違ひで裏口の方へ曲つて行つたのが眼に留まると、恐い物にでも追はれるやうに反対の方角へ一散に走つた。

ふすまを開け閉めする音やドタバタと階段を急いで駆け下りる音が聞こえてくるようである。それどころか庄造の息遣いや追われる者としての恐怖感すら感じられる。庄造の悲しみはもちろん分らないでもない。が、それ以上に一匹の猫に捨てられた男の惨めさや虚しさがあまりにも滑稽でおかしく、まるでコントのようなラスト・シーンであり、「猫と庄造と二人のをんな」という小説にふさわしい完璧な終幕である。読者は辺りに漂う「フンシの匂い」を嗅ぎながら、徐々に遠ざかつていく情けない男の後姿をじっと見つめ続けることとなるのだ。

さて、庄造とおりんとのやりとりや間の抜けた庄造の言動、心理描写、そして女以上に女らしいリリーのしぐさ（このことについては、「猫と庄造と二人のをんな」に限らない。例えば、冒頭に載せた歌の中にある「ひとりさびしくづくまる」といった言葉は、本来であれば「ねこ」と結び付くものではないだろう）など、読んでいてニヤリとせずにはいられないほど愉快なのであるが、何よりも「猫と庄造と二人のをんな」の魅力の一つとして、会話文に現れる《上方方言》の面白さが挙げられるだろう。思わず声に出してみたくなるような、流暢で味わい深い上方方言は、小説の世界と鮮やかに融和して、情感の溢れる作品を形作るのに役立っている。

谷崎潤一郎の作品に初めて本格的に上方方言が登場したのは、「卍」『改造』昭和三年（昭和五年）という小説においてである。「卍」は柿内園子という女性の一人称で語られるのだが、会話文はもちろんのこと、地の文まで上方方言という徹底ぶり。

あゝ、……………先生、（柿内未亡人は突然はらくと涙を流した）……………その疑ひさいなかつたら、……………今日までおめおめ生きてる私やあれしませんがねんど、……………さうかて死んでしもた人恨んだとこで仕方あれしませんが、今でも光子さんのこと考へたら「憎い」「口惜しい」思ふより戀しいてく、……………あゝ、どうぞ、どうぞ、こない泣いたりしまして堪忍して下さい。……………

哀愁を帯びた女性の声ののって届けられる上方方言は、実に肉感的で陰翳に富み、読むものを耽美の花の咲き匂う快樂郷へと遊ばせてくれることであろう。「卍」からは、谷崎潤一郎の関西に対する憧憬と、上方方言への傾倒や執着がひしひしと伝わってくる。名作である。

ところで、谷崎潤一郎の随筆に「其の歡びを感謝せざるを得ない」（『活動俱樂部』大正九年）というものがある。活動写真好きの谷崎が、活動写真の製作に携わることができた喜びを綴つたものである。私の、谷崎潤一郎に関するこの文章の締めくくりは、非常に恐縮なことではあるがこの随筆のタイトルの言葉を使わせていただくことにしよう。

谷崎潤一郎との邂逅は私にとって大変得難い、貴重なものとなった。谷崎潤一郎というメフィストフェレスによつて「痴人」と成り果てた私は、この先も一心不乱に彼の書いたものを読み、耽美の花のあまりの美しさにいつまでも酔いしれ、詠嘆することであろう。一人の偉大な作家に出会つたこと、その歓びを感謝せざるを得ない！